

辺境地域に対する関心が高まっており、例えば程志政訳「西藏の一瞥」(3-6) 趙君豪「東北履痕記」(3-8~12、4-2) 伯時「滇黔苗話」(4-8)など、辺地の民族や風俗などを主題とした文章も多くなってきた。

これは北伐の結果として、1928年12月に南京国民政府によって、形式的ではあるものの、辛亥革命以来の全国統一が実現されたことと関連する。これまで無関心だった国内の僻地を、統一されるべき「辺境」、その住民を「団結」すべき「自民族」の一部として強く意識するようになったことは、上海を代表するグラビア総合誌『良友』画報の同時期の旅行関連記事にも確認できる(拙文『良友』の旅行関連記事 1920~40年代の旅行と近代国家『アジア遊学』103号、2007年9月を参照)

日中戦争勃発後も、『旅行雑誌』は上海で発行され続けた。1938年11月、観光地を中心としながら初めての地域特集「西南専号」(12-11)を編纂し、やがて黄炎「西康調査日誌」(1939年5~7号連載)のような本格的な調査報告も登場するようになった。

1942年8月、桂林において旅行社直轄の出版機関が創設され、12月まで同時に上海版と桂林版が発行されていた。編集部が桂林に移った17-1(1943年1月)以降、誌面では熟練した研究者による西南、西北地域に関する学術的考察が主流となり、民俗・民族学雑誌の様相を呈し

写真2



1926年日本花見旅行団(『旅行雑誌』創刊号 16ページ)

ていた。これらの文章から、当時、民俗学・民族学の課題及び研究手法を分析し、戦時中同誌が持った意味を学史において位置づけることが今後の課題である。

なお、編集部は18-6(1944年7月)より重慶に移動し、1946年に上海に戻ったが、雑誌は1949年まで中断することなく発行されていた。以降、同名雑誌は台湾(雑誌の創始者によって1950年3月まで)と大陸(接收された雑誌社によって1955年まで、以降『旅行家』と改名)でそれぞれ刊行されていた。

華東師範大学の所蔵は1945年初ままでであるが、中国国家図書館、京都大学人文科学研究所、国際日本文化研究センターなどの所蔵と比べ、戦時下の激動期である1937年以降も欠号が少ない点は貴重であると言える。

## Voices of Young Scholars 7

### 浮世の麗しい影 浮世絵の美人絵略論

衣 曉龍(華東師範大学中国民俗保護開発研究中心博士生) Yi Xiaolong

2007年7~8月の間、神奈川大学21世紀COEプログラムの招きで、日本で浮世絵芸術を研究する機会を得た。二週間という短い期間ではあったが、拠点リーダーの福田アジオ教授や指導教員の田上繁教授をはじめとするCOEの方々のお陰で、充実した研修生活を送ることが出来た。この場を借りて、感謝の気持ちを伝えたい

と思っている。

浮世絵は流派や分類が多いため、その内容も複雑で入りくんでいる。本文は浮世絵芸術の中で、最も重要である「美人画」から出発し、浮世絵芸術について簡単に述べたいと思う。

「浮世」という言葉は元来仏教用語である。日本では、

15世紀以降「塵世」、または「俗世」という意味で使われ、16世紀以降は、妓楼や歌舞伎など享楽にふける場所を指すことにもなった。浮世絵の題材として最もよく使われているのは仕女画であり、「美人画」と称される。なかでも妓楼で働く女たちの姿を描いたものは、江戸時代の派手な社会の気風の描写であるといえる。

浮世絵は庶民の生活を描写する風俗画でもあり、江戸時代には早くも当時の世俗画業界の中心になっていた。18世紀後期、浮世絵画家の作品が大量に広まって、美人画は隆盛期をむかえた。浮世絵の構図、独特な人物造形、鮮やかな色彩で形成された強烈な対比、及び主題内容などに日本画の特色が溢れており、中国画及び西洋画と顕著な違いをもっている。

初期の美人画は日本の貴族文化の一部ともいえよう。その題材は、仏教に関するもの以外は主に上層社会の貴婦人たちの生活を描いた。その後、武士階級の地位の上昇につれ、女性の家庭内の地位も貴族時代より高くなり、美人画の内容もだんだん武士階級の文化の一部に拡大した。江戸時代以降、美人画が繁栄期に入り、その題材も大きく変わった。美人のモデルが多く歌舞伎役者などになり、美人画はますます世俗的な様相を呈するようになっていった。そして19世紀半ばに浮世絵美人画の発展は終焉を迎えた。

浮世絵美人画が世俗的で淫靡な表現にまで向かったのは、日本の伝統的な幽玄で婉曲な審美主義とはまったく

相容れないように思われる。しかし、よく考えてみるとこのことはそう理解しがたいものではない。

まず、日本人が古くから性に対して、開放的な態度をもって来たこと。この点は日本人のうわべの印象とは一致しないように思われる恐れがあるが、今日に至るまで依然として繁栄する日本のポルノ文化からみても、日本の性に対する態度は比較的開放的であることがわかる。日本文化の性格は「菊」と「刀」の複雑な合体である。

次は、浮世絵美人画が盛んになった時代背景との関係である。江戸時代は、貴族、武士の地位が低くなり、新興の商人階層が急速に増大した。商人文化は貴族文化や武士文化とは完全に異なるものであり、より享乐的な傾向が強い。この現世の楽しみに対する愛着と追求が、美しく露骨な美人を描く浮世絵芸術に反映された。しかし、このような転換が浮世絵芸術を墮落させたのか、それともそれを新しい境界まで推し進めたのか、意見はまちまちである。

私が思うに、われわれはポルノ芸術に適切な地位を与えるべきである。今日の芸術道徳観では、いかなる芸術形式をもみだりに否定してはならない。まして浮世絵芸術はかつて一時代を築き、日本、ひいては西洋の絵画芸術に巨大な影響を及ぼしたのだから。

(衣曉龍さんは2007年7月26日～8月8日まで、訪問研究員として来日された。)

\*本稿は中国語で提出されたものを劉湯水(RA)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で一部手を加えたものである。

## Voices of Young Scholars 8

# 香港における日本のテレビドラマ

王 志垣 (香港大学日本ドラマ専攻修士生 / RA研究員) WONG Chi Hang

1970年に放映された「サインはV」(TBS、1969年)から、日本の連続ドラマは香港人の心の中で重要な位置を占め、香港人全体の記憶の中の欠かせない一部分になった。「魔の变化球サーブ」でバレーボールが好きになったり、おしんの不運に毎晩涙をこぼしたり、ガラスのりんごを愛の証としたりする者が続出するほどであった。しかし、このように30年来、香港人が幾度も感動

してきた日本ドラマは、21世紀になってからやや勢いが衰えてきたようだ。「HERO」(フジテレビ、2001年)と「白い巨塔」(同、2003年)を除き、深い印象を残したドラマはほとんどなく、全盛期とは雲泥の差がある。2005年に放映された韓国の「大長今(邦題:宮廷女官チャングムの誓い)」が多大人気を集め、以降、各局は競って韓国ドラマを放映し、香港で「韓流ブーム」を呼び起こ